



検索内容をなお一層深掘りしていく場合、上位語と下位語を使うと便利である。その便利さは、検索の目的を明確にし、焦点をしぼることで、さらに効果的となる。

第十六話 上位語と下位語へと検索範囲を広げる

今回は、上位語と下位語について説明することにする。これらは、広義語と狭義語とも呼ばれている。検索を進めていくと、ある段階から検索の範囲を広げたり、深めたりすることが必要になる。この検索の範囲を広げたり高めたりするのに使用するのが上位語である。逆に、狭めたり深めたりするのに使用するのが下位語である。

上位語と下位語を意識して検索を進めることの本質は、思いつきでのネットサーフィンによる行き当たりばったりの弊害から逃れることにある。これにより、調べるべき範囲を、合理的にチェックし、系統だてて行うことが容易になる。

例えば、今年の福島原発の爆発事故を契機に、我が国だけでなく世界各国が、これまでの「原子力発電」の見直しを迫られ、原子力発電以外の発電方式に関心が集まった。世界の発電方式の見直しにまで範囲を広げるのに役立つのが、上位語である。

「原子力発電」の上位概念である「発電」や「電力」全体で調べれば、「原子力発電」の他に、「火力発電」、「水力発電」、「太陽光発電」、「風力発電」などがあり、それぞれの発電方式の長所・短所や、今後の可能性について調べることができる。

逆に、原子力発電がすべて危険なのかどうかを調べるには、原子力発電の色々な原子炉について、事故を起こした原子炉とそれ以外の原子炉について、安全性や経済性の観点から、違いについて調べる必要がある。この場合には、下位語を調べることになる。

原子炉の下位語をウィキペディアで調べてみれば、「軽水炉」（「加圧水型原子炉」と「沸騰水型原子炉」）、「重水炉」（「CANDU炉」、「新型転換炉」、「ガス冷却重水炉」）、「黒鉛炉」（「黒鉛減速ガス冷却炉」、「黒鉛減速沸騰軽水圧力管型原子炉」、「熔融塩原子炉」）、「高速炉」（「高速増殖炉」）があることがわかる。

日本での導入経緯を調べてみれば、最初に導入されたのは「黒鉛炉型」であり、その後は「軽水炉型」が主流となった。さらに、「軽水炉型」の「沸騰水型軽水炉」を採用している電力会社は、東北電力、東京電力、中部電力、北陸電力の原子力発電所であり、「加圧水型軽水炉」を採用している電力会社は、北海道電力、関西電力、四国電力、九州電力、日本原子力発電であることがわかる。

さて、今年の9月に、台風15号（9月）が日本各地に被害を及ぼし、異常気象の問題が改めてクローズアップされた。異常気象は日本だけでなく、世界各地で起こっている。今年だけでも、

オーストラリアのクイーンズランド州を超大型のサイクロン「ヤシ」が直撃（2月）、アメリカではハリケーン「アイリーン」がニューヨークを襲撃（8月）、フィリピンのルソン島では台風17号と19号（9月と10月）が襲撃、多数の死者を出している。

このように、世界各地での異常気象にまで広げて調べるためには、日本に被害をもたらしている「台風」の上位概念である「熱帯性低気圧」で調べる必要がある。世界各地の「熱帯性低気圧」には、「台風」、「ハリケーン」、「サイクロン」などがあり、これらのキーワードにより、日本以外の世界各地の異常気象についても調べることができる。

以上からも分ることであるが、上位語にはさらに上の上位語、下位語にはさらに下の下位語があり、用語は多段階の階層をなしている。動物や植物の分類体系を思い起こせばよく、すべての分類は多階層の構造を持っている。

さらに留意すべき点は、この階層は通常複数存在することである。例えば、現在大きな問題になっているタイの洪水騒ぎであるが、「異常気象」による大雨だけでは説明がつかない。調べてみると、経済成長に伴う「森林伐採（森林破壊）」が関係していることがわかる。

地球の「異常気象」だけでなく、経済成長に伴う「環境破壊」という観点から、キーワードを探す必要が出てくる。上位語に「自然破壊（環境破壊）」、下位語に「都市化」や「宅地造成」、「河川の治水」などなどの用語が、次々に見つかる。

すなわち、ある事柄を調べようとする場合、どの観点から調べるかによって、上位語や下位語は、大きく変わってくる。調べる目的が途中で変われば、調べるシソーラス全体が、全く変わってしまう。

この問題と表裏一体なのが、世の中のものは、すべて複数の側面を有している点であり、これに留意すべきである。例えば、ホテルや旅館は「宿泊施設」であるが、「保養施設」、「観光施設」、「コンベンション施設」、「研修施設」でもある。災害時には、「緊急避難施設」としても利用される。いずれにおいても、上位語と下位語がそれぞれ存在する。

「味の素」を例に、もう少し説明しよう。「味の素」は、食事を美味しくする調味料の一種であり、「化学調味料」の代名詞のように呼ばれた。後に「うまみ調味料」と呼ばれるように変わり、最近では「アミノ酸」とのみ表記される場合も少なくない商品である。

これは、「味の素」に求められる社会的関心や要請が変化してきたことによる。生活水準の高度化により、技術的な進化の度合いに応じて、呼称も大きく変わってきている。「化学調味料」から「うまみ調味料」へ呼び方の変化は、これを反映している。

この「味の素」が、人体に危険な要注意添加物として社会問題化した事件もあった。1960年代、中華料理を食べたアメリカ人が軽い炎症を起こす事件が頻発した。この原因は、当時、中華料理に多用されていた味の素のグルタミン酸ナトリウムが原因とされ、「中華料理店症候群（グルタミン酸ナトリウム症候群）」と呼ばれた。

このように、料理を美味しくする「うまみ調味料」、工業製品としての「化学調味料」、健康にやさしい自然食品「食品無添加物」、健康を損ねる毒性を有する「要注意添加物」としての扱いにより、調べるべき上位語や下位語、さらに同義語、関連語も、当然のことながら違ってくる。

したがって、資料を探す場合に重要なのは、資料収集の早い段階で、調査の目的を絞り込むことが大切になってくるのである。これによって、検索に使用するキーワードも目的に合わせて探し直し、再検索に着手することが求められる。

調べる目的を曖昧なままに作業を続けてくと、資料を雑然と集めるだけに終わってしまう。ウェブ上には膨大な資料が存在する。早い段階に調べる焦点を絞って、系統立てて情報検索することが重要になる。今回は、「反意語」・「対語」について、説明することにする。